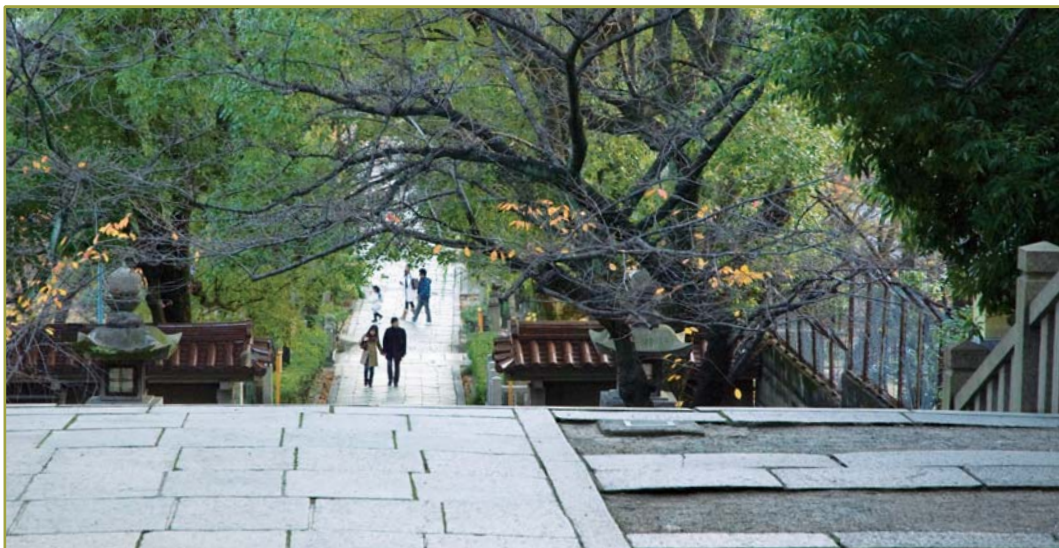




編集後記

From Editor

大阪・上町台地の東縁にある高津宮は、都心近くだが木々に囲まれた静かな場所。人々が自然に集まってくる

木には「力」がある。では、その「力」が伝わくものは何だろうか。そのひとつは、きっと人々の思いだろう。

東京に住んでいた幼い頃、近くの神社の大きな木に登ったのを思い出す。体全体で木の幹にしがみついて、手を伸ばして枝をつかむと、葉や木の皮がこすれて落ちた。たどり着いた枝から周りを見渡した時の少し得意な気分。掌を嗅いでみると独特のにおいがした。一日の時間が今よりずっと長かった頃、体中の感覚で木の存在をとらえていた。

木に囲まれたその神社は、毎年催されるお祭りの舞台。境内に御輿が繰り出されて、子どもから若者、老人まで、いろいろな人が集まった。その日、神社はまちの人たちのエネルギーがあふれる場所になった。

もうひとつの思い出は雪国でのこと。私は小学生の時に3年間だけ青森県で暮らした。転校した先の学校は古い木造の校舎で、床も机も全部木製。思い出すのは、冬の大掃除。先生が積もった雪を窓からスコップで廊下にどんどん放り込み、それを子どもたちが大騒ぎしながら履いていた長靴で踏み広げた。その雪が溶けてきたのをモップで拭き上げて掃除は完了。そんな寒い季節には、教室の薪ストーブの暖かみがうれしかった。用務員さんの所から薪を運んでくるのも児童の当番。ストーブの柵に弁当を吊って保温していた光景は今も心の中に残っている。

木の建物や道具は、人間の身体感覚に合っているように思える。触れて、感じて、その温かみに包まれる。丁寧に扱えば愛着も増すし、時には自分たちで修理もできる。かつては、身の回りの道具や家や学校にも、そんな「木の感触」がふんだんにあった。こうしたことに思いをめぐらせると、木が持つ温かみが、人の暮らしや子どもの成長にとって、やはり重要で不可欠だと感じられる。

最近私は、休日などの神社巡りを趣味のひとつにしている。大阪市内でも、上町台地の方に行くと、高津宮や生國魂神社など、古くからの由緒を持つ大きな神社がいくつもあつた。そこには木があつて、水と土があつた。木立の参道を歩いていると、それだけで気持ちがいい。

木はひとつのランドマークでもある。それは空間的な意味でもそうだが、人と人とのつながりや思い出の中にも存在する。木があることで、その色合いがより鮮やかになるような気がしている。

—— 京 雅也

表紙写真 雨の日も雪の日も、毎日森に出かける「智頭町 森のようちえん まるたんぼう」の子どもたち（鳥取県八頭郡）
裏表紙写真 再生された雑木林の中にある「ハケ岳倶楽部」の建物（山梨県北杜市）／理想の森づくりに向けてドングリをポットに植え付ける「薪く炭くKYOTO」のメンバーたち（京都市北区）／かやぶきの里を歩きながら景観と文化を保全する暮らしを学ぶ、「古材文化の会」の人々等（京都府南丹市）

CEL 95号 特集 ■ 私たちの暮らしをつなぐ木の力

発行●平成23年1月1日 頒価1,000円（送料別途）

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 (CEL)
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2
■発行人 多木秀雄 Hideo Taki
■編集人 京 雅也 Masaya Kyo / 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集●関西ビジネスインフォメーション(株) 内 CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307
印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2011 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所 (CEL) の活動内容はインターネットホームページ [http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/] でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで